

二十 ローカル列車に揺られて

先日、山口県北西部と西部を走るローカル列車に乗った。二輛のディーゼル車が、山陰線長門市駅から下関駅まで七十七キロメートルを、途中の二十一の駅に停車しながらのんびりと進む。列車の旅が普通だった頃にはよく通った路線である。わたしは、服のポケットに入る大きさの『雑草手帳』という小冊子を携えて、両側に山が迫るところでは写真を観察し説明文を読み、見晴らしのよいところでは眼を休めて景色を楽しんだ。

ふと、聞くともなく耳に入るアナウンスに違和感を覚えた。「次はイガミ、イガミ」という声は「イ」にアクセントを置いていて、「ミ」は接尾辞のように聞こえる。日頃聞いたり話したりしている発音と違う。その地名は、漢字で「伊上」と書く。録音した女性はこの表記を無視して読んだのだろう。だが漢字表記からすれば、「上(カミ)」は「神」の場合と同じく、「カ」にアクセントがある。「伊」の意味ははっきりしないが、「伊上」は、真ん中の「ガ」の方を強くするのが順当で、地元ではそう発音している。地元のイントネーションを知らない人が、強い「イ」から始めたのだろう。しかし、「伊上」が二つ

の漢字から成ることに注意して、二つのシラブルに分かれる語として、気分的にだけでも「伊」と「上」のあいだに一瞬の間をおけば、自然に聞こえただろう。だいぶ走ってまた、車内アナウンスの「ユタマ」という発音が耳にとまった。「タ」が高く、「マ」を付け足すように低く終わるイントネーション。だが、駅名は「湯玉」である。「玉(タマ)」は、「タ」にアクセントを置く「魂(タマ)」と区別して発音する。猫の名を呼ぶように発音してはいけない。一音の「湯」は通常のように強く「ユ」と発声して、「玉」とのあいだに一瞬の間をおく気持ちで、「タ」に強勢を置かずに読めばよかったのだ。

山陰線を逆に進んで東へ向かえば萩市がある。ここは全国的に知られた市で、テレビにもときどき登場する。すると人々は決まって「ハ」を高く「ギ」を低く発音する。それを聞くとこの地方の者は違和感を覚え、わたしの家内などはいつも不平を言う。漢字の「萩」は、秋に花を咲かせる植物を表わす。そのイントネーションは東京語でも、「ハ」を低く「ギ」を高くするのだから、なぜそのように発音するのか分からない。ていねいに「お」をつけた場合と混同しているのだろうか。でもそれは植物ではなく食物のこと。

乗客が数人しかいない静かな列車の中で時間をおいて聞いた言葉を、わたしはぼんやりと自分の語感を信じて考えたのだけれども、ここに書きつけるので、念のために辞書で調

べた。机上にあるのは三省堂の『国語辞典』の古い版。日本語の性能を高めた金田一京助の監修で、各語にアクセントが示されている。わたしの考えたことは間違っていないようだ。アクセントについてはいつも、先頃亡くなった日本語の名手のことを想い出す。丸谷才一さんは、プロ野球に「腹」という名の選手がいるようだと言った(笑い)。もちろん人の姓だから「原」である。しかし、それを「ハ」を低く「ラ」を高く発音するのでは、「腹」と言っていることになる、と言うのである。「ハラ」という言葉でいつも口にはのぼるのは、「腹」と「原」である。それを区別するために、アクセントの置き方が違う。じつはかく言うわたしも、近所にあった「原」という地名を子供の頃から正しく発音していたのに、「原」という姓を「腹」と発音しているから、人のことは言えない。今は古典となった映画の主演女優原節子の名を、年長の人たちが「ラ」を高く「ハラ」と言うのを聞いて倣ったのかもしれない。

地元の人たちの発音の方がおかしい事例が山口県にある。県庁所在地「山口」は、今まで言った理屈からすれば、「山」の「ヤ」を低く「マ」を高くするのが標準のアクセントである。山口県でも「山」をそのように発音するのに、地名「山口」を言うときは逆に「ヤ」を強く「マ」を低くする。西の京という言葉は山口のことを指すが、それは、戦国時代の太内氏の本拠地に、京都の公家たちが何人も滞在して京文化がとり入れられたからである。

京言葉が「山口」の発音に影響したのだろうか。

言葉づかいは他人の話し方に影響を受けるのである。時代とともに言葉はわずかずつ変化する。日本語の名手だった金田一・丸谷といった人たちはそれを教えてくれたけれども、大量情報の時代になって変化は早くなった。そうでなくても歳をとると、世の中の言葉づかいが自分を置き去りにすることに気づく。最近困っているのは、前文を否定して後文を続けるのにたった一音の「も」で済ませることである。この「も」は、簡潔な漢文を切りつめて読み下す場合に、「…するも、…」というように用いられていた。それは古くさく聞こえ、数十年前来、会話で聞いたことはなかったし、書き言葉でもほとんど見たことはなかった。昔の漢文調の文章が好きな新聞関係の誰かが、見出しの語数を短縮するのに使い始めたのだろうか。ところが、なじみのない若い人がそれを真似るようになったせいかな。「も」には並列の用法もあるのに、名詞に直接「も」をつける例を見るようになった。しかも、新聞でもテレビニュースの字幕でも、日常使われる「…だが」などの言葉が十分入るスペースがあるにもかかわらず「成功も、…」と言われると、とまどってしまう。

さて、言葉についての老人の繰り言はもうよそう。実際、二時間余り列車に乗ってのんびり過ごしていれば、去来する想念は移りゆく。山口県北西部の海岸に平地は少ない。伊

上の次の次の駅から、列車は北側の大きな湾から離れて南へ曲がり谷あいを進む。そのまま海岸を行くなら、その突端に広い瀬があり、向こうに角島(つのしま)がある。橋脚を何本も立てた長い橋が人の気を引いて、観光客がたくさん来るようになった。その近くに古い言葉で特牛(こつとい)と呼ぶ漁港がある。特牛のあたりを牛と見て、その沖に突き出るようにある島を角と見立てているのかしら。もしそうなら、視点は海にあるのだらう。だが、列車の着く特牛駅はついぶん離れた山の中にあり、牛の角を見ることはできない。

いくつか駅を過ぎて列車はまた海岸に至る。長門二見駅である。ごく小さな港に駅舎を建てる土地がなかったのだらう、奥の谷に駅がある。本州西端部の西の海を響灘と呼ぶ。冬には、強い北西の風が吹いて海岸に打ち寄せる荒波の音が響く。その海岸線にとびとびにわずかにある平地に住居を建て、漁をし、切り開いた田畑で稲や野菜を栽培して、生活を営んできた土地柄である。長門二見駅から次の宇賀(うか)本郷駅近くまで、海から山が立ち上がっているのだ、岸辺の山を削って国道と鉄道が通してある。その途中のカーブの先端に夫婦岩がある。車からも列車からもちらつと見える。もちろん、しめ縄を渡したこの夫婦岩が「二見」という地名を献上したのである。

わたしはここを通るたびに、この夫婦岩が古い由緒を誇るもので、二見が浦の元祖だと

思う。全国的に名を知られているのは伊勢の二見が浦だ。そこには立派な社があつて興玉神社という。長門二見の夫婦岩は小さめで、そばには社を建てるスペースもない。しかし、人間の精神がまだアニミズムの状態だった古代、精霊は目立つ自然物に宿ると考えたのだから、御神体である夫婦岩そのもので十分だったろう。伊勢の興玉神社に祭られる主神は、猿田彦大神、宇迦御魂(うかのみたま)大神で、境内社に綿津見大神がいる。猿田彦は『古事記』・『日本書紀』の天孫降臨の場面に出る神で、人間だろう。宇迦御魂の「うか」は食物を意味し、こちらの方が古い神で、夫婦岩の神霊はもともと宇迦御魂だったと考えられる。この神はのちには宇賀神とも書かれた。すると、長門二見のそばの宇賀本郷という地名が特別の響きをもつ。伊勢の二見の近くにそういう地名はない。じつは、鉄道駅のある長門二見・宇賀本郷・湯玉はみな大字「宇賀(うか)」に属するのだ。伊勢の方の興玉神社という呼び名の「玉」も、こちらの地名に関連する。「宇賀」の地に湯玉があるのだ。それだけではない。長門二見の北隣にも矢玉という港がある。「玉」はこの海岸を指定するもう一つのキーワードである。「興玉」は「沖玉」を意味するのかもしれない。伊勢興玉神社にある境内社の綿津見大神は、狭い伊勢湾よりも、響灘の沖に水平線まで広がる海(わたつみ)にふさわしい。

この見方を支持するもう一つ重大な要素がある。長門二見の夫婦岩の真西にあの神の島

「沖ノ島」がある。長門の夫婦岩から東西線を引くと正確に沖ノ島を通る。春分・秋分の日に、岸の小高いところに登って見れば、太陽は沖ノ島に沈む。そこは夜に太陽神の眠る島である。沖ノ島ははるか古代から神聖な島だった。特定の日だけにだけ男子が島に入ることを許された。本州西端・九州・壱岐・対馬に囲まれる海を行き交う人々にとって、ここは特別の島だったのだ。そこを祭る神社は筑紫の宗像大社。響灘の西の海は玄海と呼ばれているが、「玄」は北と結びつく言葉なので、その視点は九州にある。弥生時代に入れば九州北岸が文明の先進領域になったから、その中心の筑前の人々が沖ノ島の神事を主宰するようになったのは自然である。農作物を育てるようになると、最高の自然神はどこでも太陽になった。長門二見の夫婦岩から沖ノ島が太陽の眠るところと見えたことは、この海に暮らす人々にとって沖ノ島の神聖さを格段に高めたことだろう。

ところで、夫婦岩から沖ノ島へ引く東西線の延長上には、もう一つ島が、もとい、対になった二つの島対馬がある。夫婦岩・沖ノ島とほぼ同緯度の場所に、阿麻氏留(あまてる)神社というのがある。祭神は天日神命と書かれているが、疑いもなく天照(あまてる)神で、太陽神である。長門西岸よりも対馬の方が古代から栄えたところだから、今注目している東西線の主たる視点は対馬側にあると考えた方がよいかもしれない。そうすると、沖ノ島

は太陽の昇ってくる方角にある。やはり、太陽は夜のあいだ沖ノ島に眠っているのである。このことから、東の海を生活の場とする海人たちが太陽神「あまてる」をその地に祭ったのだろう。その近くには和多都美(わたつみ)神社というのもあって、豊玉姫が祭られている。「興玉」の「玉」はやはり海に係っているのだ。ところで、長門の矢玉・宇賀・湯玉は古代国制の豊浦郡に属している。豊玉姫は豊(とよ)の海岸(浦)の玉の名のつく(地)の姫を神格化したのかもしれない。この結びつけは牽強附会だろうか。

ともかく、太陽信仰が重要になった時代に、長門二見の夫婦岩・沖ノ島・対馬と東西に広がる海で、ゆるやかにつながる信仰体系ができたと考えることができる。あまてる神の発展形「あまてらすおおみかみ」は太陽神で、女神である。沖ノ島の祭神は宗像三女神の長女とされていて、夫婦岩の祭神である宇迦御魂も女神とされる。豊玉姫は海の女神である。海辺に暮らす海人たちは女神の体系で母なる海と太陽を崇めたのだろう。

わたしがこのようにロマンティックな想像をするのは、昔観たNHKの番組のせいである。それによれば、古来、琉球から本州へつながる列島で、海岸の地先から太陽を拝む風習があつて、向こうにある島は、「あお」島や「おお島」と呼んで崇められてきた。その典型が日向の青島。沖縄では、太陽の昇る久米島を女性のノロたちが祭り、首里城の王も

遙拝した。大和には神聖な三輪山がある。番組は、内陸の三輪山から東の果ての海岸までを調査したという仮説を紹介した。その東西線に沿って神社がづらなっているのは、夜そこで火を焚いて東西線を測量したからだというのである。三輪山のはるか東に伊勢神宮の斎宮があり、海岸に達すると伊勢二見が浦の夫婦岩がある。それらを王は大和から遙拝したことになる。そういう測量は、王権がある程度発展したのちのことだろう。

他方、沖ノ島は海上にあるから、小高い山に登れば沖ノ島を通る東西線を簡単に観測できた。こちらの方が古いと考えることができる。そして、この海を航海する海人たちにとって、目立つ山を目印に方角を見定めることは、実際に日常的な作業だった。長門二見の背後の一番高い山は狗留孫山である。またの名を御嶽(おだけ)という。仏教以前の山岳信仰の山だろう。響灘に浮かぶ船から海人がいつも見ていたはずだ。この山は沖ノ島を通る東西線から少しずれているけれども、そこから沖ノ島だけでなく対馬まで見通せたはずだ。神聖な山とされるいわれがある。蛇足ながら、沖ノ島を祭る宗像大社は正確に太宰府政庁の真北に位置している(近くに対馬見山がある)。太宰府から宗像大社とその本宮沖ノ島を遙拝することは、北方の玄海にまつわる天と海共にあまの神々を拝むと意識されただろう。ところで、太宰府政庁の真西にも夫婦岩がある。福岡市の主峰油山の尾根にある。太宰府政庁は山の夫婦岩と関連させて立地されたのかもしれない。この夫婦岩と太宰府政庁

とを結ぶ線の東の果てに、宇佐神宮(の奥の山)があり、さらに国東半島で海に達する。国の先を国の東と書いた視点は、太宰府にあったのではないだろうか。

夢想が過ぎたようだ。けれども、長門の夫婦岩の由緒が古いことには、考古学的な傍証がある。宇賀、矢玉と船で北へ向かい岬を回りこんだところに出ると、特牛の北まで短い距離において集落がつらなる。これら全体の地名を神田という。その神田岬の北のつけねの平地に、考古学上有名な土居ヶ浜遺跡がある。弥生時代前期から後期の墓地が見つかり、三百体以上の人骨が掘り出された。一番目立つ特徴は、男性の平均身長が縄文人よりも三、五センチメートル高いことだった。縄文人とのその違いは、渡来人の血が入りこんでいることを示唆する。土居ヶ浜人の形質は、中国山東省の遺跡で掘り出された人骨に似ているという調査もある。大陸から水稲耕作がもたらされたことをきっかけに弥生時代は始まった。その水稲を運んだ人々は海から来た。

人と稲を運んだ海流は対馬海流である。玄海に入りこんだ海流は東に向かい、本州西北端の角島で北東へ押しやられる。だが陸地に近い流れの一部は角島の南側に向かう。今でも響灘の海岸にはいろいろなものが流れ着く。漂着物は、南海産のヤシの実の代わりに、日常生活の品々で大陸の音色を響かせる。神田・矢玉・宇賀では、こうして海からやって

来た人々が、新しく文明化された暮らしを主導しただろう。土居ヶ浜の墓地に眠っていた人たちはそのことを沈黙のうちに語る。神田地域には神玉という地名もある。「神」のつく地名は誇りを表明していて、「うか」と呼ぶ宇賀の地にも光輝がただよっていたろうか。先進の対馬・壱岐・九州北岸の人々と同系統の文明である。この列島の弥生時代の幕を開いたその文明が、遠く沖ノ島を望んで、太陽と海の女神たちを祭る信仰体系を育んだのである。そして、沖ノ島を通る東西線上にある長門の夫婦岩はそのかなめ石の一つだ。だから、長門二見の夫婦岩が元祖だったという説の蓋然性は高い。

長門二見駅を出て海岸を走る列車から夫婦岩がちらりと見える。沖ノ島は見えないが、今日は海も穏やかで水平線まで海原が続く。古代この海岸で暮らした人々のことを考えながら、車窓から海を見つめる。宇賀本郷・湯玉からは耕作地が目につくようになり、やがて次の駅からはそれがいつそう広がり、人家も増える。しだいに耕作地が増えていくと、想念は見えている水田に向かう。列車が山あいを走っているあいだも、耕作放棄地に雑草が生い茂っているのを見た。平地が広くなったところでも、やはり雑草の茂ったところがある。家族構成によって耕作をあきらめた水田所有者もあるだろう。農地を借りて耕す組織が生まれているはずだが、鉄道と小川に挟まれたような耕運機や稲刈り機の入りにくいと

ころは、荒れたままにしてある。稲穂の垂れた中に、あちこち稗が立っている田もある。わたしの限られた見聞からすると、この地方では働き手が雇用されていて、日曜休日だけの農家が大多数のはずだ。

農地の疲弊だけが目につくのではない。店か何かの施設だった建物が利用されなくなつて、雑草がからみつくほどになったところをいくつも見た。モーターゼーションのせいもあつて山陰本線自体がさびれている。単線なので上下の列車をすれ違わせるために二組敷いてあつた線路の片方が撤去された跡にも、そちら側のプラットホームにも草が茂つていくところがある。その雑草が枯れているのは、せめてものことに除草剤が撒かれたせいだろう。しかし、そのはずれには緑色をした生きた草があり、そばの空き地も雑草が占拠している。そして、荒れるにまかされている元耕作地があるのだ。

ローカル列車に揺られれば、水稻栽培を始めて文明を発展させてきたこの列島で、われわれが人口減少という真に未曾有の試練に直面していることを知る。車窓からわたしは、小冊子を読んで名を知ったばかりの、在来のあるいは外来の雑草を見つめる。